

# 韓国語の強意表現の形態的類型

## －機能語化されていないものを中心に－

### Morphological Patterns of Korean Emphatic Expressions

#### － Focusing on Non-functionalized Words －

金 賢 珍  
KIM HYUN JIN

#### Abstract

Emphatic expressions are positioned broadly as “patterns of expression for emphasis or stress.” Amongst these, it can be considered that there are word patterns like “functionalized forms” and “non-functionalized forms” which go beyond the level of words. In this paper, focusing on the Korean language, I take up non-functionalized emphatic expressions, and conduct a comprehensive investigation of patterns of expression for emphasis or stress in dictionaries and other published works. Based on these results, a division is made between “phrasal forms” and “sentential forms”, and on top of this an attempt is made at analysis by focusing attention on their concrete formal characteristics.

#### 1. はじめに

モノ・コトの程度を強めて表す表現には、「強意」の意味機能しか持たず辞書的意味内容の乏しいものから、辞書的意味を持ちつつ強意のために用いられるものまで様々である。

- (1) a) 어제는 추웠다(昨日は寒かった)  
b) 어제는 아주 추웠다(昨日はとても寒かった)  
c) 어제는 손발이 얼 정도로 추웠다(昨日は手足が凍るほど寒かった)

(1)の文はいずれも「昨日は寒かった」ことを表しているが、(1a)が寒かったことだけを述べるのに対して、(1b)と(1c)は「寒さ」の度合いを強めて表現している。さらに、(1b)と(1c)を比べると、(1b)は程度副詞の「아주」(とても)によって単純に寒さの程度を強めているのにすぎないが、(1c)は「손발이 얼 정도로」(手足が凍るほど)という比喩的表現を用いることによって、さらに具体的、感覚的に生々しく寒さの甚だしいことを伝えている。強意表現の中で、(1b)のような類を「機能語化された」強意語とし、(1c)のような類を「機能語化されていない」強意表現に分けられる。機能語化された(1b)のような強意語が強意表現の中心的なものであることは言うまでもない。しかし、強意表現を「強意のための表現形式」というように広義に解

積すれば、強意語の他にも(1c)のような語のレベルを超えた様々な表現形式が強意のために使われていることも事実である。

本稿では、このような強意表現の位置づけも踏まえながら、(1c)のような語の範囲を超えた広意の強意表現を中心に、今日用いられている韓国語の機能語化されていない強意表現にはどのようなものがあり、形式的にどのような特徴があるかについて調査し、その多様性を包括的に考察する。

## 2. 考察方法及び調査対象とする言語資料

本稿では実語の意味を借りてきて聞き手により具体的に、感覚的に、直接的に強意の内容を伝える機能語化されていないものを取り上げ、形態的特徴を考察する。そのためには、強意表現の目録を得て形態的に分類することが必要とされるが、従来の研究では強意表現を網羅的に取り上げているものが見られないのが現状である。しかし、本稿の対象となる機能語化されていない強意表現の形態的特徴の全体象を把握するためには、その目録作成が不可欠であると思われる。特に、機能語化されていない強意表現は発話時の話者の主観的な感情に依存して使用され、常により刺激的でより印象的な表現が追究されるという性質があり生成と消滅が激しいため、何を基準に、何を資料として用いるかが一層重要になる。このような点を考慮し、現在変化の途中にあるものよりすでに定着したものを中心に調べるのが適切であると思われる。

そこで、日常的な言語生活にとって必要な語と表現を収録している辞書をもとに強意表現と判断されるものを拾い出すことにした。それをもとにして、機能語化されていない強意表現が文の中でどのように使われているのかを見るため、出版された小説、随筆、童話、新聞記事などを調査した。本稿で用いた辞書とその他の言語資料は以下のとおりである。

### 【辞書類】

- ・李熙昇編著(1983)『国語大辞典』民衆出版社
- ・大阪外国語大学朝鮮語教室編(1986)『朝鮮語辞典(上巻・下巻)』角川書店
- ・金星出版社辞典チーム編(1987)『ニューエース国語辞典』金星出版社
- ・金星出版社編(1991)『金星版国語大辞典』金星出版社
- ・油谷幸利・門脇誠一・松尾男・高島淑郎編(1993)『朝鮮語辞典』小学館
- ・延世大学言語情報開発研究院編(1998)『延世韓国語辞典』斗山東亜

### 【その他の言語資料】

- ・小説：『人間練習』他7冊
- ・童話：『韓国語名作童話1, 2』
- ・随筆とその他：『古物商』他8冊
- ・新聞：東亜日報社説(2006.1～12月)

### 3. 句形式の強意表現

名詞に助詞や副詞などが結合した「句形式の強意表現」は強意表現の中で最も多様であり使用頻度も高い。主として副詞的に用いられて様々な強意機能を果たす。以下、その主な6個の形式を取り上げる。

#### 3.1 「-없이」型

「-없이」型の強意表現は、名詞または用言の名詞形に存在詞「없다」(ない)の副詞形「없이」(なく)が付くものが最も多いが、名詞以外の要素に付く場合もある。

- (2) a) 무엇이냐 엄마 손으로 밤낮 없이 바빴습니다.(何でも母の手で昼晩関係なく忙しかったです。)<sup>1)</sup>  
 b) 어쩌다 나타나는 마을은 그지없이 평화롭다.(たまに現われる村はこの上なく平和だった)  
 하루 종일 아이들과 뛰고 뒹굴고 씨름하는 은찬에게는 턱없이 부족한 양이었다.  
 (一日中、子供達とはしゃぎ回ったり、子供の世話をするウンチャンにはとても少ない量だった。)  
 c) 그녀와 함께 하는 그 순간들은 더없이 행복했다.(彼女と共に過ごすその瞬間瞬間がこの上なく幸せだった。)

(2a)は名詞に「없이」が付いた例、(2b)は分離不能な存在詞表現「그지없다」「턱없다」の副詞形が強意表現として用いられる例、(2c)は副詞に「없이」が付いた例である。

名詞に「없이」が付く場合は、さらにいくつかのタイプに分けられる。次の(3)のような本来の名詞に「없이」が付いた例がこの形式の典型であり、最も多く用いられる。

- (3) 끝없이(限りなく) < 끝없다(限りない) < 끝(終わり)+없다  
 수없이(数え切れないほど) < 수없다(数え切れない) < 수(数)+없다  
 사정없이(容赦なく) < 사정없다(容赦ない) < 사정(事情)+없다  
 영락없이(確かに) < 영락없다(的中する) < 영락(零落)+없다  
 인정사정없이(情容赦なく) < 인정사정없다(情容赦ない) < 인정사정(人情事情)+없다  
 정신없이(我を忘れて) < 정신없다(無我夢中だ) < 정신(精神)+없다  
 터무니없이(法外に) < 터무니없다(根拠がない) < 터무니(根拠)+없다  
 한(이)없이(限りなく) < 한없다(限りない) < 한(限)+없다  
 형편없이(非常に) < 형편없다(思わしくない) < 형편(形便)+없다

このタイプは名詞と存在詞の間に主述関係があり、主格助詞「-이/가」(が)が省略されてきたものとみなすことができる。

次の(4)のように名詞の位置に用言の名詞形(함名詞形)を用いる例もある。種類は多くないが、使用頻度は高い。

- (4) 빠짐없이(漏れなく) < 빠짐없다(漏れない) < 빠지다(漏れる)  
 숨김없이(隠しだてせずに) < 숨김없다(隠しだてのない) < 숨기다(隠す)  
 아낌없이(惜しみなく) < 아낌없다(惜しまない) < 아끼다(惜しむ)  
 어김없이(確かに) < 어김없다(確かだ) < 어기다(破る)  
 남김없이(余すところなく) < 남김없다(余すところない) < 남기다(残す)  
 틀림없이(間違いなく, 確かに) < 틀림없다(間違いない) < 틀리다(間違う)

(5)のように名詞に助詞「-에」(に), 「-도」(も)が付くこともある。

- (5) 남에 없이(人並み外れて) < 남(人並み)                      전에 없이(とりわけ) < 전(前)  
 둘도 없이(二つとなく) < 둘(二つ)                      수도 없이(数え切れないほど) < 수(数)

さらに、名詞の位置に「連体形＋依存名詞」の構造が用いられてより複雑な形の強意表現が造られる。依存名詞としては、「데」(ところ, 場合), 「수」(方法, 仕方), 「나위」(～するまでもない), 「틈」(隙間), 「것」(こと, もの)などがよく使われる。

- (6) 끝간 데 없이(果てるところなく) < 끝가다(果てる)  
 더할 데 없이(この上なく) < 더하다(激しくなる)  
 나무랄 데 없이(非の打ち所がなく) < 나무라다(嗜める)  
 이를 데 없이(この上なく) < 이르다(至る)  
 견딜 수 없이(耐え切れないほど) < 견디다(我慢する)  
 그럴 수 없이(非常に) < 그렇다(そうだ)  
 더할 수 없이(この上なく) < 더하다(激しくなる)  
 셀 수 없이(数え切れないほど) < 세다(数える)  
 참을 수 없이(耐えられないほど) < 참다(耐える)  
 더할 나위 없이(この上なく) < 더하다(激しくなる)

(7)は分離不能な表現の副詞形を強意表現として用いる例である。つまり、「없이」の前の要素は、少なくともこれらの表現にかかわるような意味では、独立の語としては機能しないものである。

- (7) 가(이)없이(果てしなく) < 가없다(果てしない)  
 그지없이(限りなく) < 그지없다(限りない)  
 바이없이(この上なく) < 바이없다(この上ない)  
 턱없이(法外に) < 턱없다(筋が通っていない)  
 위불(이)없이(間違いなく) < 위불(為不)없다(間違いない)

最後に、きわめて少ないが「다시」(もう), 「더」(さらに)のような副詞に「없이」が結合し

た例がある。

- (8) 다시없이(この上なく) < 다시없다(この上ない) < 다시+없다  
더없이(この上なく) < 더없다(この上ない) < 더+없다

### 3.2 「-만큼」型

名詞に副助詞「-만큼」(ほど, ぐらい)が付いた表現も強意表現としてよく用いられる。副詞的用法として用いられるものである。

- (9) a) 열린 창문으로 갑자기 햇빛만큼이나 부신 새소리가 가득히 쏟아져 들어왔어요.  
(開いた窓から急に日差しのような目映い鳥の鳴き声が一杯注がれました。)  
“직원 일에는 눈곱만큼의 관심도 없으면서.”(「職員のことには目くそほどの関心もないくせに。」)  
b) “할매, 나 거지는 아니요. 빌어먹을 생각은 터럭만큼도 없소.”(「おばあちゃん, 私, 乞食ではありませんよ。物乞いをするつもりは毛頭ありません。」)  
너무 맛있는 그것이 손바닥만큼밖에 없다는 게 아쉬울 따름이다.(あまりにもおいしいスパゲッティが手の平ぐらいしかないのが, 残念なだけだ。)

「-만큼」(ほど, くらい)は程度の意味を表す助詞であるので, ある性質を持つと考えられる典型的なあるいは極端な名詞と結びつくことによって, 「それほどに〜だ」という強意の機能を果たすのである。このとき, (9a)に挙げた例のように「-만큼」の後に, さらに強意の副助詞「-이나」(も)が付け加わる場合が多い。この型は副詞的に用いるのが普通であるが, (9a)の2番目の例のように助詞「-의」(の)を付加することによって連体的に用いることもできる。このタイプには, 他に次のようなものがある。

- |                |                     |
|----------------|---------------------|
| (10) 터럭만큼(毛ほど) | 티끌만큼(塵ほど)           |
| 조막만큼(拳ほど)      | 콩알만큼(豆の粒ほど)         |
| 눈곱만큼(目くそほど)    | 손톱만큼(手の爪ほど)         |
| 코딱지만큼(鼻くそほど)   | 털끝만큼(髪の毛の先ほど)       |
| 쥐꼬리만큼(ネズミの尾ほど) | 병아리 눈물만큼(ひよこの涙ほど)   |
| 하늘에 별만큼(空の星ほど) | 하늘의 별따기만큼(空の星を取るほど) |

(9b)に挙げた例のように「名詞+만큼」に助詞「-도」(も)や「-밖에」(しか)が付くと, 何かが「ないこと」を強調する表現になる。このタイプには他に次のようなものがある。

- |                     |              |
|---------------------|--------------|
| (11) a) 터럭만큼도(毛ほども) | 티끌만큼도(塵ほども)  |
| 조막만큼도(拳ほども)         | 콩알만큼도(豆の粒ほど) |

눈곱만큼도(目くそほども)	손톱만큼도(手の爪ほども)
코딱지만큼도(鼻くそほども)	털끝만큼도(髪の毛の先ほども)
쥐꼬리만큼도(ネズミの尾ほども)	병아리 눈물만큼도(ひよこの涙ほども)
b) 터럭만큼밖에(毛ほどこか)	티끌만큼밖에(塵ほどこか)
콩알만큼밖에(豆の粒ほどこか)	조막만큼밖에(拳ほどこか)
눈곱만큼밖에(目くそほどこか)	손톱만큼밖에(手の爪ほどこか)
코딱지만큼밖에(鼻くそほどこか)	털끝만큼밖에(髪の毛の先ほどこか)
쥐꼬리만큼밖에(ネズミの尾ほどこか)	병아리 눈물만큼밖에(ひよこの涙ほどこか)
c) 발 사이의 때만큼도(足の間の垢ほども)	손톱의 때만큼도(手の爪の垢ほども)
발뒤꿈치의 때만큼도(踵の垢ほども)	발가락의 티눈만큼도(足指の魚の目ほども)

(11a, b)から分かるように、このタイプの表現において2つの助詞は互いに交換可能であるが、使用頻度の点では「名詞+만큼도」のタイプの方がよく用いられるようである。(11c)は「名詞+만큼도」のタイプの前にさらに「名詞+의」が付いた変種であるが、この場合は表現が固定しており、「-도」を「-밖에」に置き換えることはできない。

### 3.3 「-처럼」型

名詞に「比喩・類推」の助詞「-처럼」(ように)が付く場合である。性質や状態あるいは動作に関して典型的にその特徴を持つと考えられる別なものにたとえて表現する。いわゆる直喩の代表的な形式である。このような直喩表現の多くは強意表現として機能し、もっぱら副詞的に用いられる。

(12) 잠자리의 날갯짓처럼 가벼운 발걸음으로 나는 고물상 문을 들어섰다.(トンボの羽ばたきのように、軽い足取りで私は古物商に入った。)

얼굴은 백지장처럼 희어 병색이 보이고, 양손에는 때묻은 형짚을...(顔は白紙のように白く、病人の顔色ようだったし、両手には垢のついた布切れを…)

오로지 한결만이 얼음 왕자처럼 냉랭한 표정으로 은찬을 노려볼 뿐이었다.(もっぱらハンギョルだけが、氷の王子のように、冷たい表情でウンチャンを睨み付けた。)

이 일이 비록 거북이처럼 느리지만 분명 훗날 세상을 변화시키는...(この仕事がたとえ亀のように遅くても、確かに未来の世の中を変えていく…)

(12)の例では、「잠자리의 날갯짓」(トンボの羽ばたき)、「백지장」(白紙)、「얼음 왕자」(氷の王子)、「거북이」(亀)のような名詞にたとえることにより、後続の「가볍다」(軽い)、「희다」(白い)、「냉랭하다」(冷え冷えとしている)、「느리다」(遅い)という形容詞の表す意味を強めている。この類の表現の多くは慣用句的に固定されており、共起制約が厳しく特定の語の強調のために用いられる。他に次のようなものがある。

(13) 바위처럼 (岩のように)	⇒ 단단하다 (硬い)
개미허리처럼 (アリの腰のように)	⇒ 가늘다 (細い)
고무줄처럼 (ゴムひものように)	⇒ 질기다 (固い)
바다처럼 (海のように)	⇒ 넓다 (広い)
바늘구멍처럼 (針の穴のように)	⇒ 좁다 (狭い)
바늘방석처럼 (針のむしろのように)	⇒ 불안하다 (不安だ)
실날처럼 (糸筋のように)	⇒ 가늘다 (細い)
총알처럼 (銃弾のように)	⇒ 빠르다 (速い)
깨알처럼 (ゴマの粒のように)	⇒ 작다 (小さい)
금싸라기처럼 (黄金の粒のように)	⇒ 소중하다 (大事な)
꿀처럼 (蜂蜜のように)	⇒ 달다 (甘い)
납덩이처럼 (鉛の塊のように)	⇒ 무겁다 (重い)
새털처럼 (鳥の羽のように)	⇒ 가볍다 (軽い)
얼음처럼 (氷のように)	⇒ 차갑다 (冷たい)
꽃처럼 (花のように)	⇒ 아름답다 (美しい)

「名詞+처럼」型の表現は次のように動詞修飾にも用いられる。

- (14) 퍼런 힘줄이 돋은 팔뚝이 막대기처럼 여위었습니다. (靑い筋が膨らんだ腕が棒のように痩せていました。)

가장 후졌다는 시골이 보석처럼 빛나 보였던 것도 인간과 자연의 그러한 ….(一番ダサかった田舎が宝石のように輝いて見えたのも、人間と自然のそういった…。)

“오늘은 아버지가 몸살이 좀 나서 말이야.” 마음이 돌덩어리처럼 무거워졌다. (「今日は父さんが身体の調子を崩してな。」気分が石のように重くなった。)

빗줄기는 폭포처럼 내리쏟아지고, 바람이 기세를 부려 우우우우 불어왔습니다. (雨脚は、滝のように降り注ぎ、風は勢いを増し、フーフーと吹いてきました。)

下線部の比喩表現が「여위다」(瘦せる), 「빛나다」(輝く), 「무거워지다」(重くなる), 「내리쏟아지다」(降り注ぐ)などの意味を強調する働きをしている。このタイプもまた, 慣用化されたものが多く特定の動詞だけを強調するのに用いられる。その他の例を挙げると次のようなものがある。

(15) 구름처럼 (雲のように)	⇒ 모여들다 (集まってくる)
눈덩이처럼 (雪の塊のように)	⇒ 불어나다 (増える)
바람처럼 (風のように)	⇒ 사라지다 (消える)
붓물처럼 (堰に溜まった水のように)	⇒ 쏟아지다 (溢れる)
산더미처럼 (山のように)	⇒ 쌓이다 (溜まる)
금지옥엽처럼 (金枝玉葉のように)	⇒ 키우다 (育てる)

## 3.4 「-같다」型 / 「-같이」型

「~와/과 같다」という表現は「~と同じだ」が字義通りの意味であるが、「~みたいだ」「~のようなだ」のような直喩表現としても用いられる。この表現から助詞の「-와/과」(と)が省かれた「~같다」(~のようなだ)の形式は専ら直喩表現として用いられ、その多くは強意表現として働く。強意表現の中で最もよく用いられる形式の一つである。「같다」の副詞形「같이」(ように)に変えて副詞的に用いられることが多い。この場合「같이」は助詞として働いていると考えてよい。そのように考えれば、「-같이」型は上に述べた「-처럼」とまったく同型の表現ということになる。実際、両者は意味・用法において互いによく似ており、少なくとも副詞的な用法に関してはほとんどの場合互いに交換可能である。

(16) a) 돌같이 차다는 별명을 들은 나의 눈물을 다들 이상한 눈으로 바라보았다.(私は石のように冷たいと言われた。そんな私の涙をみんなは不思議がって見ていた。)

문을 열자 눈감고 앉았던 소녀가 나비같이 가볍게 일어나 차 밖으로 내렸습다.(ドアを開けたら目を瞑っていた少女が蝶のように軽く立ち上がり、車の外へ降りました。)

b) 지금 그의 즉위식에 중국의 관리들이 고급 승용차를 타고 구름같이 모여들었다.(今彼の即位式に中国の官吏たちが高級乗用車に乗って雲のように集まってきた。)

깨알같이 글자를 써 붙여 놓은 볼펜이 테구루루 굴렀다.(ゴマ粒のような字を書いて貼っておいたボールペンがころころと転がった。)

「-같이」型の表現は、「-처럼」型と同様、形容詞も動詞も修飾することができる。(16a)の「돌같이」(石のように)と「나비같이」(蝶のように)はそれぞれ後続の形容詞「차갑다」(冷たい)と「가볍다」(軽い)を強調しており、(16b)の「구름같이」(雲のように)は動詞「모여들다」(集まってくる)の程度が甚だしいことを表している。(16b)の「깨알같이」(ゴマの粒のように)も表面上は動詞「쓰다」(書く)を修飾しているが、その意味を考えると、「깨알같이 작다」(ゴマの粒のように小さい)の「작다」(小さい)という形容詞が省略されており、その省略された形容詞の意味を強調していると解釈される。

『標準国語大辞典』(斗山東亞, 1999)では、「-같이」を「前の語が表す典型的なある特徴のように」と解説し、助詞「-처럼」を「様子が互いに似ていたり同じだったりすることを表す」と解説している。微妙に意味を区別しているようであるが、明確ではない。実際、「-같이」型と「-처럼」型はほとんどの場合互いに自由に入れ替えが可能であるように思われる。両形式共に比較的使用頻度が高いものを挙げると、次のようなものがある。

(17) 태산같이	태산처럼	(太山のように)	⇒ 높다(高い)
꽃같이	꽃처럼	(花のように)	⇒ 예쁘다(きれいだ)
쏜살같이	쏜살처럼	(射られた矢のように)	⇒ 빠르다(速い)
칠흙같이	칠흙처럼	(漆黒のように)	⇒ 어둡다(暗い)



백지장같이	백지장처럼	(白紙張のように)	⇒ 하얗다(白い)
총알같이	총알처럼	(銃弾のように)	⇒ 빠르다(速い)
얼음같이	얼음처럼	(氷のように)	⇒ 차갑다(冷たい)
불같이	불처럼	(火のように)	⇒ 뜨겁다(熱い)
개미허리같이	개미허리처럼	(アリの腰のように)	⇒ 가늘다(細い)

ただし、「-같이」型にはそのもとなる「-같다」型があり、これが文末形として、あるいは連体形に活用して、強意の機能を果たす場合がある。そのような場合には、「-처럼」型の表現に置き換えることはできない。

(18) a) 엄마는 잘 몰랐지만, 엄마 얼굴의 주름살이 마구 뒤엎힌 거미줄 같았습니다. (母はよく分からなかったが、母の顔の皺は、絡み合っている蜘蛛の巣のようでした。)

겨울인데도 원표네 방바닥은 얼음장 같았다. (冬なのに、ウォンピョの家の床は氷の板のようだった。)

b) 그 청춘의 불로 태우지 못할 것이 없다. 용광로 같은 심장은 무쇠라도 녹인다. (その青春の火で燃やせないものはない。溶鉱炉のような心臓は鉄鉄でも溶かす。)

“니도 내한테는 하늘 같은 자식인기라.” (「アナタも私にとっては、天のような子供なんだ。」)

(18a)は「-같다」型が文末述語として用いられている例であり、(18b)は連体形「같은」による連体用法の例である。いずれの用法においても強調の対象を表す語は省略されている。たとえば、(18a)の2例はそれぞれ「くしゃくしゃである」「冷たい」ことを強調していると解釈される。意味の中心になる語が省略されていても意味の理解に不都合が生じないのは、この種の強意表現は共起関係が固定されており、特定の語の修飾に用いられることが了解されているからである。類例の主なものに次のようなものがある。

- (19) a) 개좃 같다(犬の陰茎のようだ)      거지 같다(乞食のようだ)  
 고래 심줄 같다(鯨の筋のようだ)      궁전 같다(宮殿のようだ)  
 꿈 같다(夢のようだ)      바늘방석 같다(針のむしろのようだ)  
 산더미 같다(山のようだ)      솜털 같다(綿毛のようだ)  
 실낱 같다(糸のようだ)      얼음장 같다(氷のかけらのようだ)  
 잠자리 날개 같다(トンボの羽のようだ)      콩나무 시루 같다(モヤシの甌のようだ)  
 바람 앞의 등(잔)불 같다(風の前灯火のようだ)  
 짝 잃은 기러기 같다(相手を失ったガンのようだ)  
 늘어진 개 팔자 같다(結構な身分になった犬のようだ)  
 물독에 빠진 생쥐 같다(水壺に溺れたネズミのようだ)
- b) 산더미 같은 큰 물살(山のような大きな波)      개떡 같은 세상(つまらない世の中)

얼음장 같은 목소리(氷の板のような声)	황금 같은 시간(黄金のような時間)
칠흑 같은 어둠(漆黒のような暗さ)	하늘 같은 고참(天のような先輩(古参))
실낱 같은 희망(糸のような希望)	닭똥 같은 눈물(ニワトリの糞のような涙)

### 3.5 「-만 하다」型

名詞に「～ほどだ, ～くらいだ」の意味を表す「-만 하다」<sup>2)</sup>が付いた形式である。

- (20) a) 칠썹! 집채만한 파도가 펄쩍 뛰어올라 앞을 가로막았습니다.(ぱしゃっ! 一軒家の大きさの波がぱっと飛び上がって, 前を遮りました。)
- b) “스물네 매가 어떻게 A4 두 장이나? 글씨를 개미 코구멍만하게 쓰냐?”(「24枚がどうやって A4 二枚になるわけ? 字を蟻の鼻の穴の大きさにでも書くわけ?」)
- c) 세탁실 문짝이 코구멍만해서 그 문짝을 뜯고 겨우 들여놓은 세탁기를 보나...(洗濯室のドアが鼻の穴の大きさで, そのドアを外してやっと入れた洗濯機を見たら…。)
- “나는 사람이 워낙 작아서 그것도 땅콩만 하겠거니 했지.”(「私は人がなにしろ小さくてそれもピーナッツぐらいかなと思ったよ。」)

「-만 하다」型の表現は, 「-같다」型と同様に活用変化が可能であるから, (20a)のように連体的に用いられたり, (20b)のように副詞的に用いられったり,あるいは(20c)のように述語的に用いられったりする。意味的には「-만큼」型に似ているが, 「-만큼」型が数量的な強調に用いられるのに対して, 「-만 하다」型は物事の大小の程度の強調に用いられるという違いがある。他の例を挙げると次のようなものがある。(21a)は「小さい」ことを強調するもの, (21b)は「大きい」ことを強調するものである。

- |                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| (21) a) 조막만 하다(拳ほどだ) | 좁쌀만 하다(粟ほどだ)         |
| 눈곱만 하다(目くそほどだ)       | 콩알만 하다(豆の粒ほどだ)       |
| 깨알만 하다(ゴマの粒ほどだ)      | 코딱지만 하다(鼻くそほどだ)      |
| 손바닥만 하다(手の平ほどだ)      | 게딱지만 하다(カニの甲羅ほどだ)    |
| 쥐꼬리만 하다(ネズミの尻尾ほどだ)   | 고양이 이마빼기만 하다(猫の額ほどだ) |
| 벼룩의 불알만 하다(ノミの陰茎ほどだ) | 쥐방울만 하다(ウマノスズクサほどだ)  |
| b) 등잔만 하다(燈臺ほどだ)     | 남산만 하다(南山ほどだ)        |
| 왕산만 하다(王山ほどだ)        | 집채만 하다(家の大きさほどだ)     |
| 함박만 하다(盛り皿ほどだ)       | 머리통만 하다(頭の大きさほどだ)    |

「-만큼」型の強意表現に助詞の「-도」が付いて「-만큼도」とすると物事が非常に少ないこと,あるいはないことをさらに強く強調する表現になるように, 「-만 하다」型の表現も「-도」を付け否定の補助用言と組み合わせて「-만도 못하다」とすると, 「小さい」ことをさらに強調する表現になる。次に示すように, (21a)の表現はすべてこのタイプで言い換えることができる。

- (22) 조막만도 못하다(拳ほどにもならない)      좁쌀만도 못하다(粟ほどにもならない)  
 금수만도 못하다(獸のほどにもならない)      콩알만도 못하다(豆の粒ほどにもならない)  
 코딱지만도 못하다(鼻くそほどにもならない)      깨알만도 못하다(ゴマの粒ほどにもならない)  
 쥐뿔만도 못하다(ネズミの角ほどにもならない)  
 게딱지만도 못하다(カニの甲羅ほどにもならない)  
 쥐꼬리만도 못하다(ネズミの尻尾ほどにもならない)  
 벼룩의 불알만도 못하다(ノミの陰茎ほどにもならない)  
 고양이 이마뼈기만도 못하다(猫の額ほどにもならない)  
 죽은 놈 콧김만도 못하다(死んだ人の鼻息ほどにもならない)  
 동네 개 짖는 소리만도 못하다(町の犬の吠え声ほどにもならない)

### 3.6 「-게」型

以上に見た5つの強意表現形式は名詞を中心とするものであった。「句形式の強意表現」として最後に取り上げるのは、用言の副詞形(「게」形)が強意表現として用いられる次のような例である。

- (23) 그런데 그 해 겨울은 참으로 지독하게 추웠습니다.(ところで、その年の冬は、本当にすさまじいほど寒かったです。)  
 “어, 어떻게 그럴 수가 있어요? 사람을 까맣게 속이고…….”(「いったい、何なんですか? 人を完全に騙すなんて……。」)  
 그 반면 자신이 값아야 할 채무는 엄청나게 많은 것 같았다.(その一方、自分が返さないといけない債務はものすごく多いようだった。)

(23)の「지독하게」(とてもひどく)、「까맣게」(真っ黒に、完全に)、「엄청나게」(ものすごく)は、それぞれ形容詞「지독하다」(とてもひどい)、「까맣다」(真っ黒だ)、「엄청나다」(途方もない)に副詞形活用語尾の「게」が付いたものであるが、後続の用言を強調する要素として働いている。

強意表現は副詞的に用いられるのが基本的用法である。機能語化された強意表現は従来程度副詞として扱われてきた。そして、その多くは用言の副詞形からの転用である。したがって、ある種の用言の副詞形が強意表現として用いられるのは当然のことである。しかし、機能語化された強意表現のうち副詞形に由来するものは、そのほとんどが「히」または「이」によるものであって、「게」によるものは「되게」しかなかった。これは、「게」が連用接続語尾として非常に生産的であることによると考えられる。「히」や「이」が限られた用言にしか付かないのに対して、「게」はすべての用言に付いてその連用接続形を造り出すことができる。この一般性のゆえに、「게」形が特殊な語類として意識されにくいのではないかと考えられる。ともかく、辞書の見出し語として扱われるかどうかに関係なく、「히」形、「이」形と同様に、「게」形もまた強意表現の重要な要素である。他の主な例を次に挙げるが、そのいくつかには「히」形ある

いは「이」形があり，互い交換可能である。

- |                       |                         |
|-----------------------|-------------------------|
| (24) 겁나게(怯えるほど) < 겁나다 | 극심하게(非常に激しく) < 극심하다     |
| 기똥차게(ものすごく) < 기똥차다    | 기막히게(すばらしく) < 기막히다      |
| 기차게(驚くほど) < 기차다       | 끔찍하게(ものすごく) < 끔찍하다      |
| 끝내주게(すごく) < 끝내주다      | 남다르게(並外れて) < 남다르다       |
| 더럽게(ひどく) < 더럽다        | 되게(非常に) < 되다            |
| 두드러지게(著しく) < 두드러지다    | 뛰어나게(際立って) < 뛰어나다       |
| 매섭게(激しく) < 매섭다        | 무섭게(ひどく) < 무섭다          |
| 미치게(狂うほど) < 미치다       | 별나게(特別に) < 별나다          |
| 별다르게(並外れて) < 별다르다     | 빼어나게(ずば抜けて) < 빼어나다      |
| 새까맣게(まったく) < 새까맣다     | 술하게(数多く) < 술하다          |
| 심하게(ひどく) < 심하다        | 억세게(強く) < 억세다           |
| 오지게(あまりにも) < 오지다      | 유다르게(格別) < 유다르다         |
| 유별나게(格別に) < 유별나다      | 유별스럽게(とりわけ) < 유별스럽다     |
| 장난아니게(ものすごく) < 장난아니다  | 죽여주게(非常に) < 죽여주다        |
| 지나치게(度外れて) < 지나치다     | 현격하게(かけ離れて) < 현격하다      |
| 현저하게(顕著に) < 현저하다      | 환장하게(気がおかしくなるほど) < 환장하다 |

#### 4. 文形式の強意表現

文形式(節形式)の表現が強意機能を果たす場合がある。この種の強意表現は，明示的な被修飾語を持たない独立用法と特定の用言を修飾する副詞的用法に分けられる。

##### 4.1 独立用法

強意表現は，その外部の何らかの語に対してその意味を強めるという働きをするのが普通である。しかし，独立用法の文形式強意表現は外部の被修飾要素を持たず，それ自体の中に強調される意味を内包している文である。別な言い方をすれば隠喩を用いた文のうち，その内包的な意味が何らかの概念の強調であるものを文形式の強意表現とみなすのである。日本語の場合で言えば，非常に「お腹が空いている」ことを表すのに「お腹と背中がくっつきそうだ」というような場合である。

韓国語で独立用法の文形式強意表現には次のようなものがある。

- (25) “사람들이 요새 나 보면 얼굴이 반쪽이 됐다고 그래.”(「このごろ皆に顔が半分になったねって言われるんだ。」)
- 여러 채의 불당마다 오체투지로 부처를 경배하고 소원을 비는 선남선녀들로 발 디딜 틈도 없다.(いくつかの仏殿にも五体投地で仏様を仰ぎ，祈る善男善女で足の踏み場もない。)
- 너무 어이가 없어 농담으로 받아쳤지만 한결은 등줄기가 서늘해졌다.(あまりにも呆氣

にとられて、冗談でやり返したが, 한гы올は背筋が涼しくなるのを感じた。)

“우리 사장님이 그러실 리가 있나. 심장이 얼음인데.”(「うちの社長がそんなこと言うはずがない。心臓が氷なのに。」)

“엄마랑 동생이 번갈아 가면서 애 등골을 빼먹어요, 빼먹어.”(「母と妹が交互にウンチャンの背骨を抜き取って食べるんだから。」)

끝탕을 하다가 결국은 나 혼자 일어났다. 얼굴을 들 수가 없었다. (思い悩んだが, 結局は私一人が立ってしまった。顔を上げることができなかった。)

그런것 쫌이야 식은 죽 먹기라는 식이다. (こんなのは, 冷めたお粥を食べるくらい簡単だといわんばかりだった。)

下線部が文形式の強意表現であるが, それによって含意され強調される語を示すと次のとおりである。

(26) 얼굴이 반쪽이 되다 (顔が半分になる)	⇒ 마르다 (痩せる)
발 디딜 틈도 없다 (足を踏み入れる隙間もない)	⇒ 많다 (多い)
등줄기가 서늘하다 (背筋が冷や冷やとする)	⇒ 놀라다 (驚く)
심장이 얼음이다 (心臓が氷である)	⇒ 차갑다 (冷たい)
등골을 빼 먹다 (脊髄を取って食べる)	⇒ 고생하다 (苦勞する)
얼굴을 들 수가 없다 (顔を上げることができない)	⇒ 창피하다 (恥ずかしい)
식은 죽 먹기다 (冷めたお粥を食べる)	⇒ 간단하다 (簡単だ)

このような表現はどの言語にも数多くあろう。そして, これからも様々な表現が生み出されていくだろう。それが強意表現であるのか単なる説明的な表現であるのか明確に区別することは難しい。けれども, 慣用化されて文字通りの意味にはほとんど関心が寄せられなくなったものについては, 強意表現の範疇に入れることができると考えられる。他に比較的よく用いられるものとして次のような表現がある。それぞれ⇒の後に与えた語の強意表現として解釈される。

(27) 간이 콩알만해지다 (肝が豆の粒ぐらいになる)	⇒ 무섭다 (怖い)
앞어지면 코 닿다 (うつぶせになると鼻がつく)	⇒ 가깝다 (近い)
목구멍이 포도청이다 (喉が捕盗庁だ)	⇒ 가난하다 (貧しい)
발등에 불이 떨어지다 (足の甲に火が落ちる)	⇒ 급하다 (急いでいる)
손이 열개라도 모자라다 (手が十個でも足りない)	⇒ 바쁘다 (忙しい)
누워서 떡먹기다 (横になって餅を食べる)	⇒ 간단하다 (簡単だ)
간에 기별도 안 가다 (肝に便りも届かない)	⇒ 적다 (少ない)
뺨속까지 떨려오다 (骨の中まで震えてくる)	⇒ 춥다 (寒い)
눈에 넣어도 아프지 않다 (目に入れても痛くない)	⇒ 귀엽다 (可愛い)
낫 놓고 기억자도 모르다 (鎌を置いて「ノ」の字も分らない)	⇒ 무지하다 (無知だ)
피똥을 싸다 (血の大便を漏らす)	⇒ 고생하다 (苦勞する)

바늘로 찔러도 피 한방울 안 나오다(針で刺しても一滴の血も出ない)⇒ 차갑다(冷たい)

文形式の強意表現が独立的に用いられる場合,いくつかの文法形式と好んで結びつく傾向がある。まず,次の例のように推量を表す接辞の「-겠-」が常に伴う場合がある。

(28) “언제 매형까지 끌어들었어요? 약삭빠르기도 하십니다. 정말 박 터지겠네.”(「いっお兄さんまで巻き込んだんですか。素早いもんですね。まったく頭が割れそうです。」)

“입 찢어지겠다, 이놈아.” 은찬은 눈물까지 흘리며 정신을 못 차리고 웃었다. (「口が裂けそうだよ, こいつ。」 ウンチャンは涙まで流しながら可笑しくて仕方がないかのように笑った。)

“아이씨, 사부님! 머리에 구멍 나겠어요.”(「師匠, 頭に穴でも開きそうです。」)

これらの下線部の表現に含まれる「-겠-」を省くと不自然な文になる。「-겠-」は「～しそうだ」の意味であるので,それぞれが比喩的に誇張した表現であることを示唆する働きをしている。上の例はそれぞれ次に示すような意味の強意として用いられている。ついでに類例を2つ追加しておく。

- |                             |          |
|-----------------------------|----------|
| (29) 박(이) 터지겠다(頭が裂けそう)      | ⇒ 競争が激しい |
| 입(이) 찢어지겠다(口が裂けそう)          | ⇒ 大きく笑う  |
| 머리에 구멍 나겠다(頭に穴が開きそう)        | ⇒ 痛みがひどい |
| 번개불에 콩 볶아 먹겠다(稲光で豆を炒って食べそう) | ⇒ 速い     |
| 머리카락에 홈 파겠다(髪の毛に溝を掘りそう)     | ⇒ 大事にする  |

推量意味は「連体形+것 같다」(～する／したみたいだ, ～である／あったみたいだ)によっても表される。この形式もまた文形式の強意表現と共によく使われる。

(30) 술은 독한 게 아니라 아주 끔찍했다. 목구멍이 타들어 가는 것 같았다.(お酒は強いというより, きつかった。喉が焼けるようだった。)

온몸의 피가 싸늘히 식는 것 같았다.(体中の血が冷たく冷えていくようだった。)

은찬은 바닥에 누워 왼쪽 눈을 감았다. 눈알이 터질 것 같았다.(웅찬은床に横になって, 左目をつぶった。目玉が破れそうだった。)

지난 3일간은 나에게도 지옥이었다. 가슴이 터질 것 같고, 머리는 스트레스로 어지러웠다.(去る三日間は私にも地獄だった。胸が裂けそうで, 頭はストレスで混乱していた。)

これらの例においても,やはり「-것 같다」は不可欠の要素である。このタイプは類例が非常に多い。主なものとして次のような表現が挙げられる。

- (31) 하늘/억장이 무너지는 것 같다(空/億丈が崩れるよう) ⇒ 낙담하다(落胆する)

피가 거꾸로 솟는 것 같다(血が逆に引き上がるようだ)	⇒ 화나다(怒る)
살얼음판을 걷는 것 같다(薄氷の張った所を歩くようだ)	⇒ 긴장하다(緊張する)
가슴이 터질 것 같다(胸が張り裂けるようだ)	⇒ 답답하다(息苦しい)
판에 박은 것 같다(板にはめ込むようだ)	⇒ 비슷하다(似ている)
세상을 다 가진 것 같다(世の中を全部持ったようだ)	⇒ 기쁘다(嬉しい, 満足だ)
우물가에 애 보낸 것 같다(井戸の端に子どもを行かせたようだ)	⇒ 걱정이다(心配だ)
않던 이 빠진 것 같다(痛んだ歯が抜けたようだ)	⇒ 시원하다(すっきりしている)

また、次の例のように、願望表現の「-고 싶다」(～したい)も文形式強意表現の必須要素になることが多い。

(32) 고양이 손이라도 빌리고 싶다(猫の手でも借りたい)	⇒ 바쁘다(忙しい)
쥐구멍이라도 들어가고 싶다(ネズミの穴にでも入りたい)	⇒ 창피하다(恥ずかしい)
귀뚜라기라도 잡고 싶다(藁でもつかみたい)	⇒ 절실하다(切実だ)
발등을 찍고 싶다(足の甲を打ちたい)	⇒ 분하다(悔しい)
깨물어 주고 싶다(噛んであげたい)	⇒ 귀엽다(可愛い)

以上に検討した独立用法の強意表現は、次のように連体的に用いられることもある。構造上は従属節になるが、明示的な強調の対象を持たないという点では、独立用法であることに変わりはない。

- (33) 그는 가난한 삶과 등골이 휘는 노동을 가능한 한 사실적으로 그렸다.(彼は貧しい生活と背骨が曲がりそうな労働をできる限り、事実に描いた。)
- 개성시와 서울은 지금의 거리감으로는 앞어지면 코 닿을 데란만...(開城市とソウルは、今の距離感覚ではつんのめれば鼻が触れるほどのところなのに…。)
- 쥐구멍에라도 숨고 싶은 심정으로 고개도 못 들고 병원을 나왔다.(ねずみの穴にでも隠りたい気持ちで、顔も上げられず、病院を出てきた。)

最後に、文形式の強意表現を造り出す文法形式に触れておこう。次の例に現れる「～할 뻔했다」(～するところだった)、「～할 지경이다」(～するほどだ)、「～기 짝이 없다」(～することこの上ない、～極まりない)などの形式は、それが付く文の意味を強める働きをしていると見ることができる。

- (34) a) “고막 터질 뻔했잖아. 자식아! 아……왜요?” (「鼓膜が破れるところだったじゃないか。こいつめ! あっ…, どうしたんですか?」)
- b) 나는 고개를 숙이고 듣느라 턱이 거의 냉면 그릇에 닿을 지경이었다. (私はうつむいて聞いていて、顎がほとんど冷麺の器につくほどだった。)

“잠도 못 자서 죽을 지경인데 그런 걸 언제 써.”(「睡眠不足で死にそうなのに, あんなのをいつ書けというの?」)

- c) 초라하고 남루하기 짝이 없는 아버지와 엄마의 모습, ….(みすばらしいこと極まりない父と母の姿, …。)

게딱지만한 오락실은 허름하기 짝이 없었다. (蟹の甲羅のようにとても小さなゲームセンターはとてもみすばらしく古びていた。)

もとの文自体は強意表現ではなく普通の文である。それが強意表現になるのは, これらの文法形式の働きである。このような強意形式はよく使われており, 類例を次に挙げておく。

- (35) a) 애 떨어질 뻔했다(流産するところだった) < 애 떨어지다(流産する)  
 숨 넘어갈 뻔했다(息が止まるところだった) < 숨 넘어가다(息が止まる)  
 얼어 죽을 뻔했다(凍って死ぬところだった) < 얼어 죽다(凍え死にする)
- b) 죽을 지경이다(死にそうだ) < 죽다(死ぬ)  
 미칠 지경이다(狂いそうだ) < 미치다(狂う)  
 머리가 돌 지경이다(頭が狂いそうだ) < 머리가 돌다(頭が狂う)  
 숨이 넘어갈 지경이다(息が絶えそうだ) < 숨이 넘어가다(息が絶える)  
 배가 터질 지경이다(お腹が裂けるほどだ) < 배가 터지다(お腹が裂ける)  
 가슴이 터질 지경이다(胸が裂けるほどだ) < 가슴이 터지다(胸が裂ける)  
 기가 막힐 지경이다(呆れるほどだ) < 기가 막히다(呆れる)
- c) 가소롭기 짝이 없다(おかしいことこの上ない) < 가소롭다(おかしい)  
 가증스럽기 짝이 없다(憎たらしいことこの上ない) < 가증스럽다(憎たらしい)  
 어리석기 짝이 없다(愚か極まる) < 어리석다(愚かだ)  
 열악하기 짝이 없다(劣悪極まる) < 열악하다(劣悪だ)  
 유치하기 짝이 없다(幼稚極まる) < 유치하다(幼稚だ)  
 지루하기 짝이 없다(退屈極まる) < 지루하다(退屈だ)  
 한심하기 짝이 없다(情けないことこの上ない) < 한심하다(情けない)

## 4.2 副詞的用法

すでに述べたように, 強意表現は副詞的に用いられるのが基本用法である。それは文形式の強意表現においても変わらない。様々なタイプの文形式の表現が用言の意味を強めるために頻繁に用いられている。その主な型を以下に取り上げる。

### 4.2.1 「-것처럼」型 / 「-것같이」型

「-것처럼」は, 依存名詞の「것」(こと, もの)に比喩・類推の助詞「-처럼」(ように)が結合した形である。これが過去連体形, 現在連体形, 未来連体形の後に続く「~するように, ~したように」という意味の表現になる。この形式の表現が次の例のように強意表現として用



いられるのである。

- (36) 스모 선수가 누르고 있는 것처럼 가슴이 답답했다. (相撲取りに押されているように息苦しかった。)

그야말로 걸신들린 것처럼 아귀아귀 먹었다. (それこそ乞食神にでも取り付かれたようにガツガツと食べた。)

핀 뽑힌 수류탄이 떨어진 것처럼 고요했다. (핀が抜かれた手榴弾が落ちたように静かだった。)

下線部は、それぞれその後の用言の意味を強めている。この形式は、文形式の強意表現の中で最もよく用いられるものの一つである。

句形式の強意表現の「-처럼」型が「-같이」型と交換可能であったように、「-것처럼」の助詞を「-같이」に入れ替えた「-것같이」の形式にしても同じように用いることができる。(36)の例を「-것같이」型に置き換えても不自然な文にはならない。

#### 4.2.2 「-듯(이)」型

依存名詞の「듯」が強意表現を造るのに用いられる場合があるが、これには3つの異なるタイプがある。一つは、「듯」を含み込んだ補助形容詞「-듯하다」によるもので、これが各種の連体形の後に置かれて「～する／したみたいだ」という類推の意味を表す表現となる。もう一つは「連体形+듯(이)」(～する／したように)の形式で、副詞的に用いられる。3つ目は、「-듯(이)」を接続語尾として用いる形で、意味・用法は2番目のものとほとんど変わらない。

- (37) a) 영신은 그 한숨소리에 땅이 꺼지는 듯한 심정이었지만, 희원은 아직 아무런….(ヨンシンは、そのため息に地面が崩れ落ちるような心情だったが、ヒウォンはまだ何も…。)

하늘에 달을 듯한 봉우리, 바닥이 흰히 보이는 계곡물까지 어느 하나 지나칠게 없었다. (天に届きそうな峰, 底がはっきりと見える溪水まで、なにひとつ抜け目がなかった。)

- b) 물이 들어가면 갈수록 배는 터져 나갈 듯이 부풀어 올랐다. (水が入れば入るほど, お腹は裂けんばかりに腫れ上がった。)

하늘의 한 귀퉁이가 무너질 듯 눈이 내리기 시작했습니다. (空の片隅が崩れるように雪が降り出しました。)

못 먹고 자라서 그래. 그러니까 걸신들린 듯이 먹어대지. (ちゃんと食べれないで育ったからなんだよ。だから, 乞食神にでも取り付かれたように食べまくるんだよ。)

지켜보던 모든 사람들이 얼어붙은 듯 침묵했다. (見ていた人々が凍りついたように沈黙した。)

- c) 그 어머니를 내 손으로 요양원으로 보내야 한다니…눈물이 비 오듯 흘렀다. (…そんな母を私の手で老人ホームに送らないといけなんなんて…。涙が雨のように流れた。)

갑자기 절절한 애정이 생긴 양, 하늘이 무너지듯 안타까운 양….(急に切実な愛情で

も起こったかのように, 空でも崩れ落ちるかのように, …。)

(37a)のような「-듯하다」形は, 強調される意味を内包するもので, 上に扱った独立用法の強意表現である。ここに挙げた例のように連体形で用いられることが多い。(37b)は「連体形 +듯(이)」の例であり, (37c)は「-듯(이)」が接続助詞として使われている例である。

「-듯(이)」型の表現は, 類推を通じて特定の意味を強調するものである。したがって, すでに扱った「-것처럼」型あるいは「-것같이」型の表現と同じ性質のものである。これらの表現は互いに入れ替えても文が成立する。

#### 4.2.3 「-정도로」型 / 「-만큼」型

程度を表す依存名詞の「정도」(ほど, くらい)や「만큼」(ほど, くらい)が未来連体形と結合し, 「~할 정도로」(~するほど, ~するくらい), 「~할 만큼」(~するほど, ~するくらい)の形で強意表現になることがある。

(38) a) 혀가 녹을 정도로 단 걸 덥석 덥석 먹더니 손가락까지 쪽쪽 뻐나. (舌が溶けるほど 甘いものをむしゃむしゃ食べては, 手の指までしゃぶる。)

등산로에는 지나치는 사람들의 어깨가 부딪힐 정도로 사람들이 붐볐다. (登山道にはすれ違う人々の肩がぶつかるほどの人ごみだった。)

b) 숨이 껑껑 막힐 만큼 기침을 토하게 만드는 그 고약한 담배는 왜 자꾸 태우는지 알 수가 없다. (息が詰まるほど咳をさせてしまうあのきついタバコをなんで吸うのか分からない。)

논의 빛깔은 수시로 아아 하는 감탄사가 절로 나올 만큼 아름다웠다. (田んぼの色合いは, 随時ああという感嘆詞が自然に出るほど美しかった。)

これらの下線部は, それぞれ後に続く用言の意味を強調している。(38a)の「-정도로」型と(38b)の「-만큼」型は意味・用法がほとんど同じであり, 互いに入れ替えが可能である。ただ, 「-정도로」型の方がより一般的で使用頻度も高いように思われる。他に類例を挙げると次のようなものがある。

- |                                 |                  |
|---------------------------------|------------------|
| (39) 혀가 안 돌아갈 정도로/만큼 (舌が回らないほど) | ⇒ 마시다 (飲む)       |
| 입이 부르틀 정도로/만큼 (口に水膨れができるほど)     | ⇒ 고생하다 (苦勞する)    |
| 입에 곰팡이가 필 정도로/만큼 (口にカビが生えるほど)   | ⇒ 말을 안 하다 (話さない) |
| 죽고 못 살 정도로/만큼 (死ぬほど)            | ⇒ 좋아하다 (好きだ)     |
| 눈이 펑펑 돌 정도로/만큼 (目がくるくる回るほど)     | ⇒ 비싸다 (高い)       |
| 이가 덜덜 떨릴 정도로/만큼 (歯ががたがた震えるほど)   | ⇒ 춥다 (寒い)        |

#### 4.2.4 「-도록」型

物事の程度や限界を表す語尾「도록」(～するまで, ～するほど)と結合して強意の機能を果たすものである。

- (40) 우리들은 목이 아프도록 외치고 또 외쳤습니다. (私たちは喉が痛くなるほど叫びまた叫びました。)

안개구름은 다시 몸이 저리도록 별님을 생각하지 않을 수 없었습니다. (層雲は, また身体が痺れるほど, お星様を思い出さざるを得ませんでした。)

밤마다 감나무 아래에 물동이를 놓고 손이 닳도록 밀었던 일들이 떠올랐다. (夜毎, 柿の木の下で水瓶を置いては, 手が擦れるほど祈ったことを思い出した。)

무지개 대신 오월의 해님이 눈이 부시도록 내리쬘었습니다. (虹の代わりに五月のお日様が目映いほど, 降り注ぎました。)

계집애같이 생겼단 말, 귀에 딱지 앉도록 들어왔는데 그 말이 너무 화가 났다. (女の子のようだね, って耳にたこができるほど, 聞いてきたが, その言葉に腹が立った。)

“그저께는 갑자기 핸들이 말을 안 들어서 코에서 단내가 나도록 뛰었다니까요.” (「おとといは, 急にハンドルが利かなくて, 鼻から焦げたにおいがするほど, 走ったんですから。」)

「-도록」型は, 上に扱った「連体形+정도로」(～するほど, ～するぐらい)の形と意味・用法がほとんど同じであるから, 入れ替えが可能である。

- (41) 목이 아프도록/아플 정도로 (喉が痛いほど)  
 몸이 저리도록/저릴 정도로 (体が痺れるほど)  
 손이 닳도록/닳을 정도로 (手が磨り減るほど)  
 눈이 부시도록/부실 정도로 (眼が目映いほど)  
 귀에 딱지가 앉도록/앉을 정도로 (耳にくそができるほど)  
 코에서 단내가 나도록/날 정도로 (鼻からにおいがするほど)

他のよく用いられる表現として次のようなものがある。それぞれと共起する主な語を示しておく。

- |                                |                |
|--------------------------------|----------------|
| (42) 발이 손이 되도록 (足が手になるまで)      | ⇒ 밋다 (謝る)      |
| 손바닥에 못이 박이도록 (手の平にたこができるまで)    | ⇒ 일하다 (働く)     |
| 검은 머리 파 뿌리 되도록 (黒髪がネギの白根になるまで) | ⇒ 오래살다 (長生きする) |
| 눈이 짓무르도록 (眼がもろくなるまで)           | ⇒ 울다 (泣く)      |

#### 4.2.5 「-게」型

すでに述べたように, 「게」は用言の連用接続形を造る最も一般的な語尾である。この語尾を用いた文形式の強意表現も非常に多い。

- (43) “울 어매한테 눈물 콧물 쪽 빠지게 지청구 들어 감시로…”(「お母さんから涙, 鼻水が出るほど怒られながらね…。」)

따뜻한 날도 귀찮아하는 체조 시간이 이렇게 살이 터지게 추운 날 있었다.(暖かい日でも面倒な体操の時間なのに, こんなに皮膚が裂けるような寒い日にあった。)

은새가 닭살 돋게 반겨 맞았다.(ウンセが鳥肌が立つように, 嬉しく迎えてくれた。)

“쥐도 새도 모르게 암매장당할지도 몰라요.”(「鼠も鳥も知らないように, 密葬されるかもしれませんよ。」)

후회스러웠다. 빠저리게 뉘우치고 있었다. 다시 살아볼 수만 있다면…。(悔しかった。骨にしみるほど, 悔やんでいた。また生きられるんだったら…。)

他にも, 次のような表現がよく用いられる。

- |                          |             |
|--------------------------|-------------|
| (44) 가슴이 찢어지게 (胸が裂けるように) | ⇒ 아프다(痛い)   |
| 가랑이가 찢어지게 (股が裂けるほど)      | ⇒ 가난하다(貧しい) |
| 개발에 땀 나게 (犬の足に汗をかくほど)    | ⇒ 뛰다(走る)    |
| 코가 삐뚤어지게 (鼻が歪むように)       | ⇒ 마시다(飲む)   |
| 배꼽이 빠지게 (臍が抜けるように)       | ⇒ 웃다(笑う)    |
| 뼈골이 빠지게 (骨髓が抜けるように)      | ⇒ 일하다(働く)   |
| 깨가 쏟아지게 (ゴマがこぼれるように)     | ⇒ 행복하다(幸せた) |
| 입에 침이 마르게 (口の中のツバが渴くように) | ⇒ 칭찬하다(誉める) |

#### 4.2.6 「-고(서)」型

等位接続機能の語尾「고」が付帯状況を表して従属的に用いられることがある。これが一部の強意表現に利用される。この場合, 「서」を付けて「-고서」の形になることが多い。

- (45) 눈에는 쌍불을 켜고서 여차하면 앞발을 휘두를 태세였다.(目には2つの灯をともして今にも前足を振り回す勢いだった。)

하루 종일 허리 한번 펴지 못하고 일하지만 언제나 손에 질 수 있는 건 빈주먹뿐이었다.(一日中, 腰を一度も伸ばせないで働くけど, いつも手に握れるのは素手だけだった。)

순간 세상모르고 자던 아저씨의 큰 머리가 내 등 뒤로 맥없이 무너져 내렸다.(一瞬, 世間を忘れて寝ていたおじさんの大きな頭が, 私の背中 of 後ろにぐったり崩れ落ちた。)

これらの例からも分かるように, 「-고(서)」型の表現は, もっぱら動詞を修飾するのに用いられる。他の類例を挙げると次のようなものがあるが, 他の強意表現に比べてあまり数は多くない。

- |                                |           |
|--------------------------------|-----------|
| (46) 입에 겨우 풀칠을 하고 (口にやっと糊をつけて) | ⇒ 살다(暮す)  |
| 밤낮을 가리지 않고 (昼夜を分けないで)          | ⇒ 일하다(働く) |

머리를 싸매고(頭を抱えて)	⇒ 고민하다(悩む)
입에 거품을 물고(口に泡を含んで)	⇒ 달려들다(くっつかかる)
눈에 쌍불을 켜고서(目に火をつけて)	⇒ 덤벼들다(くっつかかる)

#### 4.2.7 「해라」型

動詞の命令形「해라」が強意表現として副詞的に用いられることがある。「～せよとばかりに」の意味から転じた用法であると考えられる。

- (47) 창가에서 세레나데를 부르며 애인의 고개가 창밖으로 나오길 목이 빠져라 기다리는  
 ….(窓の外でセレナーデを歌いながら恋人が窓から顔を出してくれるのを首が抜けるように待つ。)  
 경기장 관중석에서 목이 터져라 응원하는 것도 좋다.(観覧席から喉が張り裂けんばかり  
 に応援するのもいい。)  
꿈지가 빠져라 하고 달리던 형은 도랑….(尻尾が抜けんばかりに走っていた兄は溝…。)

下線部の表現はそれぞれ次に示すような動詞句の命令形であり、それぞれ後続の動詞の表す意味を強調する働きをしている。このタイプも、もっぱら動詞の修飾に用いられ、例の数は多くない。

- |                               |            |
|-------------------------------|------------|
| (48) 눈이 빠져라(目が抜けるほど) < 눈이 빠지다 | ⇒ 기다리다(待つ) |
| 목이 터져라(喉が裂けるほど) < 목이 터지다      | ⇒ 외치다(叫ぶ)  |
| 꿈지가 빠져라(尻尾が抜けるほど) < 꿈지가 빠지다   | ⇒ 달리다(走る)  |

#### 5. 終わりに

本稿では機能語化されていない強意表現を「句形式のもの」と「文形式のもの」とに分けて考察した。句形式の強意表現は、名詞または名詞形に副詞、助詞を付けて用いられるのがほとんどである。本稿では、①名詞または名詞形に存在詞「없다」(ない)の副詞形「없이」が用いられるもの ②名詞に助詞「-만큼」(ほど、くらい)が付いたもので、さらに助詞「-도」(も)や「-밖에」(しか)を添加するもの ③名詞に助詞「-처럼」(ように)や「-같이」(ように)が付くもの ④名詞に「-만 하다」が付くもので、助詞「-도」(も)を付加して〔否定〕の程度を強めるもの ⑤他に、一部の形容詞に副詞接尾辞「게」(ように)がついたもので、機能語化した強意語と変わらない性質のものでよく使われているものを取り上げた。

文形式の強意表現は、独立的に用いられる場合と副詞的に用いられる場合に分けて考察した。独立用法の強意表現は、外部に明示的な被修飾語を持たず、その表現自体の中に強調される意味を内包している表現である。副詞的用法の強意表現としては「-것처럼」型(～する／したように)、「-것같이」型(～する／したように)、「-듯(이)」型(～するように)、「-정도로」型(～するほど)、「-만큼」型(～するぐらい)、「-도록」型(～するように)、「-게」型(～するように)。

「-고(서)」型(～して), 「해라」型(～せよとばかりに)を取り上げた。このなか, 「-고(서)」型, 「해라」型の以外は互いに意味用法が似ているため, ほとんどの場合に入れ替えて用いることが可能である。

本稿では, 句形式と文形式の強意表現に考察対象を絞って形態的な特徴を把握することに止まっている。他にも反復形式, 接辞, 補助動詞など強意の役割を果たしていると判断されるものも含め, 韓国語学習者のためにも日本語の強意表現と比較対照を通じて両言語の特徴を示すことは欠かせないと考える。これに関しては今後の課題として残したい。

#### 注

- 1) 例文の出典は2に示した調査資料である。出典の個別表記は省略する。
- 2) 「-만 하다」の構造分析の違いにより分かち書きをせずに連ね書きをする場合もあるが、本稿では「-만 하다」で統一することにする。

#### 参考文献

- 林八龍(2002)『日・韓国国語の慣用的表現の対照研究』明治書院  
T. H. Svartengren 著 佐々木建訳(1958)『強意的直喩の研究』研究社  
국립국어연구원(1999)『標準国語大辞典』斗山東亜  
김준기・김향숙(2003)『현대국어 관용어 연구』韓国文化社  
김향숙(2003)『한국어 감정표현 관용어 연구』韓国文化社  
문금현(1999)『국어의 관용 표현 연구』国語学会国語学叢書 34  
임팔용(2006)『한・일 신체어휘 관용구의 대조연구』한국외국어대학교 일본어연구소